

## 徳島県慢性期医療学会 演題・抄録登録フォーム

施設名	法人名	医療法人 凌雲会			
	施設名	稲次整形外科病院			
	所 属	リハビリテーション部			
発表者	姓		姓	名	
	ふりがな		いちみや	ちひろ	
	氏 名		一宮	千尋	
	職 種		理学療法士		
共同演者	氏 名		ふりがな		職 種
	姓	名	姓	名	
①	河村	和也	かわむら	かずや	作業療法士
②	土井	大介	どい	だいすけ	理学療法士
③	稲次	正 敬	いなつぎ	まさのり	医師
④	湊	省	みなと	あきら	医師
⑤	稲次	圭	いなつぎ	けい	医師
⑥	稲次	美樹子	いなつぎ	みきこ	医師
⑦	高田	信二郎	たかた	しんじろう	医師
⑧					
⑨					

演題名現在文字数 22

演題名	通所リハビリにおけるLSAを用いた評価と考察
抄録本文	本文現在文字数 1026
<p><b>【はじめに】</b>  生活期リハビリテーションにおいては、身体機能やADLの向上に加えて、QOLの向上が重要であると考えられる。当通所リハビリテーションにおいては、居宅からの送迎やリハビリテーションを通して、定期的な外出機会と活動範囲の拡大を図ってきた。生活空間の広がりは他者との交流や気分転換などの刺激を生み、QOLの向上に関連しているのではないかと疑問を持った。しかし、実際に生活空間の広がりやQOLの関係性の有無については検証できていなかった。そこで、今回、生活空間の広がりの指標としてLSA(Life space assessment)を用い、QOLとの関係性を検証したので報告する。</p> <p><b>【対象】</b>  当通所リハビリテーションの利用者で、認知症や失語症のない、16名(男性7名、女性9名、平均年齢71.5歳)を対象とした。</p> <p><b>【方法】</b>  対象者に対して、生活空間の広がりの指標としてLSA、QOLの包括的な評価尺度であるEQ5D日本版をそれぞれ測定した。LSAについては質問結果をもとに計算式に当てはめ点数化し、EQ5D日本版に関しては評価結果をスコア換算表に当てはめて点数化した。統計処理にはJ-STATを用い、有意水準は5%未満とした。</p> <p><b>【結果】</b>  LSAの得点とEQ5Dのスコアにおいて相関係数<math>r=0.24</math>、危険率<math>p&gt;00.5</math>と有意な相関を認めなかった。</p> <p><b>【考察】</b>  研究予測としては、通所リハビリテーション利用者は生活空間に一定の広がりがあるため、QOLも高いと思われた。しかし、研究結果では、生活空間の広がりにQOLは関係しないことが示唆された。その要因として、生活空間が狭くても、自宅内での趣味活動や家庭内役割があればEQ5Dの値は高まり、生活空間が広くても痛みや不安感があり、他者との交流が乏しいことや、社会参加が得られていなければEQ5Dの値は低下するのではないかと考える。実際の現場では、生活範囲を広げることが良いことであり、それがQOLの向上につながると考えているゴール設定をよく目にする。一概にQOL＝活動範囲の拡大ではなく、その人にとっての価値、生活スタイルや習慣をもとにQOL向上に向けた目標設定と、計画立案が重要であると改めて考えさせられた。通所リハビリでは生活期でのリハビリテーションが中心となり、機能改善は困難な場面も見られる。そのような方への生活範囲の拡大、QOLの向上をどのようにしていくかが今後検討すべきと考える。</p>	